



志保之里

初編

1冊5
308
30



門 508
卷 30

○路傍地藏辨



將地藏石像而置街衢之側者往々有之無知其始也蓋是以言六道能化而無智者所為也風雨犯之鳥獸汚之埋馬蹄之埃沒蒿菜之露其實是輕蔑不敬其過莫甚乎此焉非唯愚俗為之緇徒亦黨之不自知其非又不能解他惑也痛乎哉以外世及澆季佛法衰耗如斯等事其類頗多庶幾後生之君子誠勗速徒改正過非乃是無窮之

七

思此也或云和光同塵結緣利物即大士之懷耳
今在路傍結緣往來者亦是利化之一端也何法
責之曰其然不敬之至豈其然乎思之思之

○對他佛稱弥陀辨

或曰世有無智者向他佛像而唱弥陀名號誠
可笑猶如呼王則言張也可不乖乎曰夫諸佛
平等大悲乃無彼此之異只是視物修善以為

喜也今其弥陀名號乃是多善根而無上功德也
聞衆生稱之而諸佛豈不歡喜乎呼王言張即相
乖者凡夫之事也諸佛大士何其然哉又云對神
稱佛號者如何曰斯事似大乘矣然神者聰明正
直惟善惟念今夫讀經稱佛皆是善事取何強嫌
之乎且佛神俱是大聖一揅無有彼此其之
清淨一味也如水之與水矣見其異者唯是凡夫
妄情也而已然如予今言則世所不許度幾益明

眼君子

○音樂佛事舊例

陋卷投先開戶君用偈有排圍而到者乃予之舊
識也寒溫既畢問曰吾子曾著音樂佛事說有文
有義誠是可賞然不知古有作此事者否曰有之
昔弘智法師以忍邪行事音聲厥初開務通識非
新莫曉故凡有福會必以簫鼓為先致令其從如
雲真俗不專於緣悟矣想夫縱使難無先蹤在苟

有其利者何必遮之况乃有前車之轍卒不可不為
矣若其為利化則雖曰愚夫愚婦之所為敢所不辭
也又何嫌乎夫大士之瞻慈卽是逆順無方殺活應
宜猶以欲鉤而牽人也今其以鼓吹而作佛事乃生
他信悅人情可謂法會之莊飾愚化之一端也十誦
律曰雖非佛制諸方為清淨者不得不行也亦此例
矣子何議之客謝而退

右弘智傳出唐高僧傳三十一

○ 聖像信不辨

有客問曰世有地藏觀音藥師等諸像而安置堂宇
往々最多其中或有靈驗之著或有無驗者於其
驗者往詣無跡終日爾於靈驗者緇白駢闐往來
絡繹嗟夫諸佛大士平等一揆何有如斯之異乎曰
其有水則月現矣無水則不現矣隱現在水而不在
月焉苟有信乃有應也無信乃無應也應驗在信何
其真聖哉且隨信水之淺深而致令應驗有厚薄也

今其愚人聞往來絡繹則驚愕而生信最深故感其
應也顯彰矣見往詣無跡乃生信亦淺故其應亦希
也若其厚矣信深歸之則何像無感應乎苟能致敬
乃飽神猶有靈威況是於佛菩薩之聖像乎於其
驗敢勿生淺淺之想此乃輕聖之大過也可不懼歟
素夫法身利見徧應無方莫感不應莫處不現豈有
彼此之異乎其之信不昂妄情而已雖理如此今其世
人依偏仰之信乃能得靈驗也宜乎於其佛像如遇

生身至心偈仰焉實是誘蒙之一端又何可議哉
惣於何佛像存生信深致敬即是當來成果之緣
因也其之功德豈淺々乎運猶為佛種何況順者乎
嗟呼吾弥陀之利物也不擇賢愚貴賤亦不隔善惡邪
正只能有信心念佛者則以大悲之心克而照攝不捨
觀音勢至亦常為其勝友加之二十五聖隨逐影護
六方諸佛證誠護念是以不令惡鬼惡神得其使
復無橫病橫死橫有厄難而能得延年轉壽也此
乃超世之弘化無上之大利不可得測者也豈翅易
往之徑路而已乎抑又為現生護念之金湯也不可
不信矣子其助禱

○善導大師口出化佛辨

或問世有善導大師像多圖口中出化佛之狀
我聞大師念佛之時從口而出光明味知有出佛
之事否曰如子之言考善導諸傳不見有斯事

但宋僧傳中少康法師高聲唱阿彌陀佛佛從口
而出連誦十色十佛若連珠狀系曰唱佛佛形從口
而出善導同此作佛事依此則知善導大師亦曾有
出佛之事也決不可疑矣蓋是諸傳之闕文也耳猶
如宋傳中闕永明十方稱佛上品上生之事也此例
頗多矣今梅慈雲四方畧傳云和尚善念仏從口出之又
曇首律師善導像贊有佛從口出之語

○木食

或來問世有絕鹽穀而食菜蔬蕎麥等以為修行
者謂之木食上人愚夫愚婦奔走信仰為真佛想
不知有說否予曰舊來往往有斯之人當有經典
之所據也我智淺識少未見其說故不敢猥談也
夫佛法之食者不擇穀蔬只不遇中食而已此乃三
世佛之通式方代不削之規則也若其隱深山幽
谷而修道者遠隔鄉閭故無穀可食唯拾木實草
菓以助身命也以食菓實而非為道也雲棲老人

辯之禪云之禪出自般舟三昧蓋精進之極恐生
則易昏非以之為道也今亦相似去柳世及流季
佛法衰弊人指奸偽昏或弥深至行道佛事只見
奇異之事乃駢圖雜沓豈翅木食乎哉因茲履淨
屠百計詐謀現異飾奇驚眩俗自誑惑愚人將邪
命之業為活計之術迷眼前之利忘身後之苦嗟乎
偶得人身殊遇佛法此時不修道何日得解脫也
化人之處世也縱保千載之壽致萬金之富只是
一夢之歡樂也耳生死事大矣常迅速屠所之羊涸
水之臭何不思之也痛哉悲矣
按弘法大師遺告有木食之說是非邪

○六十六部

世有巡遊杖桑六十六州而每列納經於神社
佛閣以為修行者謂之六十六部又曰廻國行
者也跋涉山川不辭峻坦綿歷年月不憚苦勞
東往西還絡繹不止近歲最甚不知其之權輿

不聞其之所出又那天主曾無其事三國經典物無
所見只世傳昔者源賴朝平時政宿世為納經僧依
此善業而生貴顯之身蓋因之為之者也呼史設為
轉輪王唯是右為之妄報未完輪迴非可羨者况蒙
王宰又况人臣宰若策勵身心修西ニル業則不運一
不常千里畢此生平直到淨刹得無此樂證無生忍
何幸如之宰唯是無智道俗之所為而不聞正道
之過也遇宰感矣實可感傷或曰尔乃瘡之宰謂
不可也

○紫式部

世傳昔者紫式部造源氏物語其文詞雅麗冠絕
古今後代雖有作者莫以加焉且謂式部乃觀世音
之化身者大非也蓋是經云以婦女身而說法或
將焉歸婦之事附會而言也身今試問之不知式

部說何法否又不知有如馬郎婦導人之事否曾無
僧史所載又不見雜傳所出若如光明皇后及舍利
居士等吾乃恕之不然憇好色之一女人也安得言木
士之應化乎嗟吁痛哉猥廢過式部而不忍輕黷
大聖其罪豈後世哉有智請詳焉

源氏七論之辨尤可也

○三十三所巡禮

世尋觀音之靈場而諸三十三處謂之巡禮凡其因
廻之際累數月歷十有餘國而到濃州之谷汲而止矣
相傳寬和法皇啓其端蓋此擬普門示現之教而為之
者也然曾無經典所出又印土支那未聞有新事只
是杖桑公龍為風無智縮白習以勇為近世殊
多其中或為現世福壽除災快樂者或為將來生
王臣貴顯之家而福祐自在者或徒效他之頻耳而名
山靈壙為遊覽者皆是不具正信不知正道之所致也
實可愍矣若夫寫信大悲及心致誠不遠千里而

為菩提者乃是皆得解脫之良緣又其不能無感亦
也可謂愚化之一端矣然此西方業百千萬分不及
其一若念佛者阿彌陀佛別聞之禮則視之憶念則
憶念之又觀世音大勢至為其勝友行住坐臥及如
在三尊前且夫真心徹到現在親見後生極樂刹
證得無生及心何必歷山涉水風餐露宿久勞行旅
其之巡禮也徒仰影像焉此之念佛也親遇真身焉
優劣曾壤不可同日而論也雲棲老人曾有遊名

山之辨亦同斯說

○閑忘夜語

予投老荒村蟄居古寺恒閉柴扉謝絕賓客止交
絕游翦若助相如之渴炊蔬忘夷齊之肌腫來則
曲肱而為枕覺了別支頤而吟哦曳筇遊原野
追無步後園無世事之汚心有閑寂之稱情只終
日倚爐而獨坐寒窓之下偶有客乘月來者不

排闥入室挑燈清話客曰凡人之在世也無不惡賤求富貴也故曰富之亦貴者是人之所欲也雖我親友不能免之綺羅之眼綿繡之衣嗜首酒好事饜出則駕肩輿僕從充前後入則倚玉几美童侍左右高明充座嘉賓接武室列方丈之饌門止駟馬之車誠是人世之人王盛也若夫說法度人聚徒肄業講經論解群典音詞吐王迅辨如流握滿慈之塵較妙德之想乃是法門之光采也我看子所為終日掩扉蕭然無事既無富潤屋未有德化入如字獨善之行似效巢許之類早曾無利見天下之功只是悠悠遊民而已古云佛法大事請退小節也子何不畧之乎曰嗟起予者子也居吾為子言之凡涉門致富者得遇世之幸而依所施之多苟不遇則君子亦窮矣老懷縱恣與世相背其之所為也不能挽人而却為人被踈焉只有箕踞白眼之謂曾無風草必偃之譽何以得致富貴然猶幸蔬食菜

義纏縷壞衲以足竟卒凍絳也又何求之有世儒猶有
云死生有命富貴在天况釋氏乎且夫弘法利人
者大士之兼懷而學佛之徒為專可歸之急也亦非不
欲之而我學廉文拙智淺德輕豈有濟世之功才辨
不及王衍之談淨業惠遠之道自疾既不能救何況
多暇乎不如尤品及貧之時而從事于斯也未晚耳性素
愛閑厭世事之喧鬧靜藏此竹林之中好嗜和飲且
作詩作文也拙詞俚語雖不足取花鳥之晨雪
月之夕吟咏性情以為閑窓之友也此吾之癖也請勿
責之元凱有尤傳之癖白氏有章句之癖文道王滿
之愛馬劉伶元亮之嗜酒子猷之竹茂叔之蓮亦乃
癖也此皆古今之所貴而子載之美談也嗟乎我老
且病矣只是生涯餘一死已矣從吾之所好而終斯
生焉客笑不答小子在側記之燈下

汝門炬範記

汝門炬範記

後者のいふ所をいふべきにあらざらん

又紫式部とわづちれりしれはたゞのいふ

源氏物語とたゞいふべしついでにあらと業平

朝臣と同一と稱し侍らよと陸奥の

之千太郎乃廻國之千之新乃嘯礼也よとて

あゝぬらとつとてつとてあゝ活命と侍らよ

しに監獄乃敷問と侍らよんこれ故と止

帝と禁せらるる所とていふ初列の取寄

年甲午乃吾我尾面國御之村年四一之千太郎れとて

俗一くまらつとら四國乃所スミヤク行ビヤと懐シむ者れ家

と存シと海シ事申俗形ニ一日行ハ旅ス

近チカに民會ノ地キ事ヲ知ル彼ノ俗ノ事ヲ知ル

ま多く見下しに事ヲつと隣ノ事ヲ知ル

用ハ公ニ事ヲ知ル法ノ師ハ事ヲ知ル同ノ道ノ事ヲ知ル

けつとされとてとてとてとてとてとてとて

かゝる事と留置シ所ハ投ケ入ルの事とてと言ハ

六角堂中山河修清水寺法性寺妙光寺
等記記——神呪ちえ奥寺及び音蓋寺と
比管懸フクワケなりし又甲日所 是名是説有り
記せしその事ハ今比て定了なる所
是く侍る

南紀山陽小東の事と順々ゆくと西山歌紀と云
いづれ坂東のく又竹苗竹苗の字いづれ
番番の字いづれ
其うと所和歌と花山法
皇の御製御製などいふことおもむくは田舎人の傳

多道法皇多道法皇のその事その事に明ら野都の歌
新拾遺集新拾遺集云修りともせ給けし時粉川の記書はて
今京師市井の事更足師家く死して三日一七
りなど念佛念佛拵拵緒緒び一筆集筆集と先明先明礼奇と
同言ふらひて好称好称名名なる海海を似似げら
あはれあはれとてつるくつるくいよひとひそめ侍る利の
琴琴不唱不唱守守る守る守者者も亦亦らられたれたののくくあり

多岐の事ありし

○往生西方淨土瑞應剛傳一冊 四十八人の往生

と記す 馬沙門 我五村上天皇の御宇天徳二

年 戊午 定曆寺の日定上人よりしりし傳持

也 日定ハ後唐の僧也

惠遠曇鸞等以下偽信の西邁と集む

○人ハ小天地トシバ 倭夷の奴婢ありしとも 踐

蹴りしと天地ハ乖りし トコナラ 柘尾明惠ハ物子と

○ マタキニル 騎驀 マタキニル 其罪と悔ひまゝして

めんれり密教の中よハ一切の善行ハさし器也

ととも騎驀よりしといふは マタキニル 徒勞のニ摩

耶歎契印多れ故也 我國神祇の御形 マカミ 亦鏡玉

鈕 フキホ 戟弓箭の類多し 篤行の士 ツキ 毎に之と用ひて

可也

○ 常教 大教 非常教 見、教書

大辟 名と教除よりハ 常教也 八虐 ハチノク 以上を免

教はるハ大非常事也凡そ教書大旨者人
主之所命命有議云

○世説に王戒年七歳衆小兒と道宗李樹の
下に遊ぶ小兒輩李と競る王戒曰樹乃
の傍にありまづ實かくの如く多し必若李のん
こまと食ふも〜〜〜と然る物と見てもやある
此童〜〜〜し

○今終の除佛像と云く名は〜〜〜經文小

り〜〜〜侍也 曰觀經余欲終時乃教

合掌又手称南無阿弥陀佛云又華嚴

經賢首云臨終勸念佛及示尊像令瞻敬

云云

○數珠の多少經説如何曰瑜伽念珠經云念珠
分別有四种上品最及中下一千八十以為上
百八珠為最勝五十四珠以為中二十七珠
為下其他四十二顆及二十一顆の念

珠ハ陀羅尼集經に出カ十四顆ハ教珠功德
經の説カあカくカくカ近世カ六十珠カの念珠カと用
是出知カと不考カ按カどカりカ一百八顆カと三人カカ小
とてカ習カせカしカとのカ
今俗云百万遍の教珠ハ
こと上ふの念珠カ

○或人曰カ管カ篔カ篨カハ今俗カ云カこカろカくカこと物カヤ曰カ孔
衍カ琴操カ曰カ管カ篔カ篨カ引カ者乃カ霍里子高カ辛カ鹿
玉カ所作カ也云云カこカろカくカくカ首カろカろカあカくカ是器
西域カくカ出カ二十且カ弦カこカまカと或カハ坎侯カと云カ

こカろカくカハ琉璃カ玉カの作カ某カ三カ絃カ子カ変カ也

○柿カ樹カ七絶カ
奇 冬陰 元鳥巢 元虫
霜葉可玩 嘉寶 落葉肥大

酉陽雜俎カに出カ

○ふカげカへカぶカくカとカ吟カ栴カ花カ實カハ善賢堂カとカいカくカ宣
胤郷カ文龜二年記カに詣カ子本カ念佛カ并善賢堂
栴カ實カ也云云

善賢堂カむカしカ子本カの關カ磨堂カに在カりしカ云
に何カもカしカ栴カ故カくカ云

傍若無人といふ俗にハ事の狼藉なりといふハ本
意ハ肩カダと云ふ者多シといふなり

○與願金剛地藏菩薩秘記

此書ハ蓮華三昧經と以て記セリ前天台座

至三品法親王良助龜山院第三皇子宗尊親王
猶子号成就院青蓮院門跡

九十斗入りて筆一筋

蓮華三昧經大應智不定
三藏訳

真言宗相承惠果和尚弘法大師に授られ

と飯朝の後室和生列の堅恵エと東寺の真

雅ヤに傳授りて醍醐及仁和寺代々秘傳す

云々

天台宗相承ハ西園寺前相国其孫竹園院の

禪師の裔に三千五百兩の金と異朝にわけて

天台の聖經等とありり清涼山大聖

竹林寺の澄徳和尚五基山修營のれり五音

金と受て蓮華三昧經とありり然り

男女のつぎうぬくわらびとせぬ程とあらわれや
あつちとほほむらじと府下及び磯田あど近頃の
民よつててふと心指と折れらるゝ宗師難波
東都もあつた日とつゆとすへ竹刺へあつたそ
ととらし

風をよ烟よ霧よとととらにふら神比白玉

○父の姉中和院の女婦藤氏比三十三回忌之辰

小塔梁書銘

浴八徳水 坐蒙宝蓮 一笑遊戯

吟吟伯女雲井のこやげくと辞して伊豫園

うらゆひゆりしとととら水りりり東海尾府

事うたの泣刺誅 任光院命 昌岳壽等 尼

念佛のり者ありし天和三の夏 国五月 別と告

とけけく念佛 ともな香炉と執誓到隔院

安養界と唱次の句も不及して息絶ししき

のこくありしととら三十三行年月の白波

昔々々々にはき遠忌とぞく養林寺より追賢の
讀經しゆり墓所は苑柳水洒ゆるり

年ゆりし昔れは道次を昔よ似る。神のまふれ

。可空大乗上人の平が学友たりし河内国西方寺と

住持して年久しくあひじゆり次は比房

はけり春秋と同じく侍りしが今年紀一対比文

と使はゆりもあらししよ月が寂せししど

よく其文つていながらゆるしど不意に化し

ゆるぬる日のころろろろろろろろろろろ

音別東園月。今開西利華

音書空及ル。孤鷹扇烟霞

。泰廟十有七回の御忌辰乙未六音御佛事一年部の折御讀經

有感一絶と吟ず

誰知待老一長吁。流水恨新歲月徂

迷蝶夢殘仍遽々。規風何事獨愁吾

薨去の前の年證書上人として御寺の地に

ついでに清松、宅と鑑せしり御牌子以下の事

命シノの年トシ睦月ムツキの元日イツヒ年トシ老ロウのシ御ミコのシ

ふりて立ゆりし春ハルのシ買カいしりや

あし不フ諱トイの夏ナツうめくし何ナニと祝イハす

御ミコ戯タシあつし心ココロをシしり

わが心ココロをシしりや東ヒガシにシりてのち

五月イツキの末スエ御ミコ醫イ薬ヤクのシり

しり御ミコの侍シ醫イとシも召メしり

何ナニの女メ將シヤウ家カ啓キせしりしに今イマのシ

言コトと謝アガヒしりし可カ也ヤ我ワのシり

しり御ミコの心ココロをシしり

大オホ樹キとシり

に命シノとシり御ミコ回マエ疾ヤのシ

る御ミコ臨リン終シユウも正マサしり

のシり

のシり

ざりしにしくりけりける月日と言て今日十七日
御法會待つけりけるもいとくわくそのつみ
作と蒙りて国志編摩の事に負せられ秘圖の
版圖と用て禁に雲に充りて一変三たび磨と磨
ゆりし伏して往來とありて南柯夢窓一く愁心
容鏡ひくちりけりけるはとありて強ゆるあのみ身く
くくあきりけりけるは御讀經の畢りに
法場にうきくゆりし、村雨のこころを袖に

かきゆりしる

思ひかきけるにゆりけるの神とけりけるはとありける
誓首三部甚深妙典二万四千五百五字三乘教外に
於て持名の二門と用りて天下の万機と撰してるに
蓮華海會にカクめたるも鳴呼 故者菩提と増
進もく猶一生補處の父法王子の佳名と
ありて三身究竟の院摩尼輪の極位に昇り
りりけるは凡そ穢國に還來りて是累

○或^人問^フ吾子^{サキ}前^ニに惟^{ダケ}惕^{テキ}鬼^キの事^トと^シ一^ニ書^ニに惟^シ惕^シ鬼^ト
書^セと^スん^ノ印^ノも^カ答^テ止^ル觀^ニに鬼^ノの發^ル相^トと明^カ
其^中三^種あり

- 一者^ニ惟^ニ惕^ス鬼^ト
- 二者^ニ時^ニ媚^ス鬼^ト
- 三者^ニ魔^ニ羅^ス鬼^ト

其^發相^各不^同なりと云^フ
又^按ず^ルに

惕^{テキ} 他^歴切^シ 惕^{テキ} 尸^羊切^シ
此^字互^ニに用^ヒて字^義異^ナる^ト也

○真^言法^門不^知教^相者^三代^相傳^則成^常見^外
道^{これ}勝^俱胎^院實^運僧^都の言^也伯^如僧^正曰^ク
れ^とひ教^旨と学^とも其^深意^と得^ばん^ば有^相に
執^ド表^德に惑^ス亦^タ常^見に^ゆじ^と密^教の
本^意先^深く諸^法の不^生と^う達^して大^空無^相の
法^に於^て表^德と可^論と^んん^ん豈^ニ末^世儀^乃の
者^能ん^や今^元字^の真^言師^及び修^驗者^等と
ん^んに^たせ^り不^生無^相の理^に達^せる^やと^し

常見^{の外}道^{なり}祈^禱と^りて^渡せ^しゆ^の

とろろひて

故園風物好 孤鶴 豈同群

杖頭高掛月 皓歌一片雲

○とろろひてとろろひてとろろひてとろろひて

とろろ歌ふやあれ也百年の素業櫻葉の

夢くろく半世の穴躬吟 餘穎の恨と残す老の坂

越行とろすれ頭の霜白に驚く世情古今又

等しきにや

○或人の方にて懐旧の歌もゆりし

くろくくろくくろくくろくくろくくろくくろく

○今歳 三月 勢州 暴雨 五月 飛弾の 迅雷

六月 駿品 大風 冒 木曾路 洪水 東都の

地震 十九日 なごよぬ 事 の こま づけ ね 七月 朔日

府下 雷 鳴 数ヶ所

人死 俗 雷火 冒 同 雷 霹 靂 市

井 及び 寺院 の 地 に 落 事 又

○米穀日々に高く初秋のころ新麥金一兩を以て
口ば、三斗余と買ふ民の困シいし、多し

京師納涼の會エも洪水云六月廿日大水河原のをの
小屋をく流る

窮故人の出ツゆも例の好くすすしてはす

の納涼雨スミうづからに、とゞげに待テぶと、と、

我、尾西津嶋の市も人々割サ十九日の洪水故物さハ

ごもごもに止ミし

路頭の兒見、目もつり、此のゆ日と追ツて、

ゆれ、そ、は、く、く、府下の貴賤、老幼、病死の數見

聞の類カ、之、而、と、以、う、と、よ、う、と、て、耳の、か、ら、ら、り、れ

さ、を、多、く、う、ら、ん、く、や、浮、世、の、常、々、ぬ、す、ご、い、ぬ

ん、て、厭、離アの、か、も、す、く、く、く、ゆ、ら、ぬ、ど、中、々、に、よ

人、あ、う、け、に、も、を、の、花、や、う、に、榮カ、一、時、め、く、境、に、お、き、

り、れ、る、人、ら、う、を、と、い、ふ、思、ひ、や、い、ち、う、ら、う、れ、て、を、摘ツ、

し、つ、ら、れ、ら、ぬ、は、ぬ、と、せ、と、う、す、く、は、て、や

ゆ、ら、ん、と、て

あはれはあひするなれせのちのふれに身とまのりぞ
の文月^{ツキ}初^{ハツ}七^{ナナ}河^カ鼓^カの情^ニ會^ヒと云^フく久^ク一^{イチ}梶^カの葉^ハり
倭歌^{ワカ}もて衣^{コロモ}穿^スけらば婦女^{メノ}の威^イに於^キ化^カるハ
上^ウ玄^{ゲン}の星^{ホシ}宿^{シュク}と以^テてりやあまのつらハ憚^{ハヤシ}るに
あはれを格^{カク}法^{ホフ}の儒^ニ士^シハいふや田^タ舎^{シャ}言^{コト}言^{コト}昏^ク静^シ
に三^ミ局^クと掩^ツて朱^{シュ}門^{メン}巧^ク々^ク歡^{カン}声^{セイ}と沸^ワくところす
只^{ただ}人間^ニ一^{イチ}葉^ハ井^イ上^ノに落^チて輕^カ雲^{クモ}夕^タの山^{ヤマ}とく
夕^タ立^タるる痛^ツさびり秋^{アキ}の初^{ハツ}風^{カゼ}るる涼^{スズ}く

いそぎいそぎのふとふとつさせずあはれ

友のしるし星々の詩一奉と贈るゆゑも

情^{ナリ}のりり昂^ス和^ニしゆ

微^ス涼^ス報^ル秋^ノ雨^ニ 飯^イ雲^{クモ} 漏^ル月^{ツキ} 新^ニ

荷^カ風^{カゼ} 清^ス老^ノ氣^キ 蘭^{ラン}室^ノ 息^イ吟^ヒ身^ミ

藜^{スズ}杖^ツ 可^ク用^フ 徑^ノ 松^{マツ}琴^ノ 識^シ有^ル 隣^ト

星^{ホシ}橋^{ハシ} 惟^ニ一^{イチ}夕^タ 玉^{タマ}露^{ツルシ} 滿^ミ天^ノ 垠^ノ

摺^チ葉^{ヨウ}とわづ便^ニに附^クしゆゑと書^キつけ

カミンサ

つれづれと枕の葉にのつものごとく手はれて
秋夕の杖

○禅宗本寺住職の給旨には某和尚とあり浄土宗
香衣の給旨には上人と記つて給ふ所は浄土宗の
僧と和尚と呼ハ禅家に准して稱する上人
あり極すは浄土宗にも古ハ和尚と 宣下有
アそをこれと采とせし康富紀文安元年八月十八日浄土宗
現存之被聴元カ和尚号事予申了悟真寺坊主
可被存知欣云旦浄家の僧に謚号と賜

多ハ和尚号也 悟真寺同祖了惠上人に故今和尚と呼と
好ヤ 廣濟和尚の勅謚也

○七月十日観音と按置する寺院(十日参り)稱して
男女多系詣す 今ハ四カ六千日に當り殊に路東清水寺
九日の夜より路もろろあらず群聚ヤ九の經論
の説も見す百年前の書にさくたれり何者
の云却て明諸国同く此日観音(参詣する
はわつし人なり)予曰京師の俗七月九日

除^{モトハラ}節の朝も迎^{ムカ}く名残夕^{トセ}に三年の月^{ツキ}い
く^ツく^ツく^ツ

清^ス夜重^シ宵^ヨ月^{ツキ} 涼^{スズ}風^{カゼ}幾^ナ歳^{トシ} 秋^{アキ}

と云^イ下^ゲ聯^{レン}と書^カして祠堂^{シヤウジヤウ}にかけゆ

又^{マタ}凡^ニ由^ヨ奈^ナ何^ニとて^ト 經^{キヤウキ}木^キに^ニか^カき^キて^テ水^{ミヅ}洒^{ソウ}人^{ジン}

寒^{サム}林^{リン}露^ロ白^{シロ} 夢^{ユメ}回^ヘ涼^{スズ}庭^{テイ}静^{シズカ}

烟^{エン}寺^ジ風^{フウ}清^ス 眼^メ霽^{ハレ}秋^{アキ}月^{ツキ}高^{タカシ}

市^チ井^イ歌^カ唱^{シヤウ}新^{シン}にのれ^レの燈^{トモ}ろ^ろし^して^て蘭^{ラン}勝^{シヤウ}會^{カイ}

の^ノり^リに^ニい^イし^シき^キし^シの^ノ秋^{アキ}も^モ悲^{カナシ}げ^ゲれ^レあ^アり^リ

あ^アか^カ泪^{ナミダ}の^ノ戸^ドに^ニあ^アげ^ゲく^クゆ^ユら^ラは^ハ或^カ人^{ヒト}の^ノ方^{カタ}も^モ

十^{ジュウ}の^ノ夜^ヨ萩^{ヒギ}の^ノ葉^ハにつ^ツけ^ケて

あ^アか^カ涙^{ナミダ}に^ニい^イし^シき^キし^シの^ノ秋^{アキ}も^モ悲^{カナシ}げ^ゲれ^レあ^アり^リ

と^トつ^ツく^クも^モあ^アか^カれ^レみ^ミて

萩^{ヒギ}の^ノ葉^ハの^ノあ^アか^カれ^レみ^ミて^テし^シの^ノ秋^{アキ}も^モ悲^{カナシ}げ^ゲれ^レあ^アり^リ

あ^アか^カれ^レみ^ミて^テし^シの^ノ秋^{アキ}も^モ悲^{カナシ}げ^ゲれ^レあ^アり^リ

○北ウツキ四ツキ月

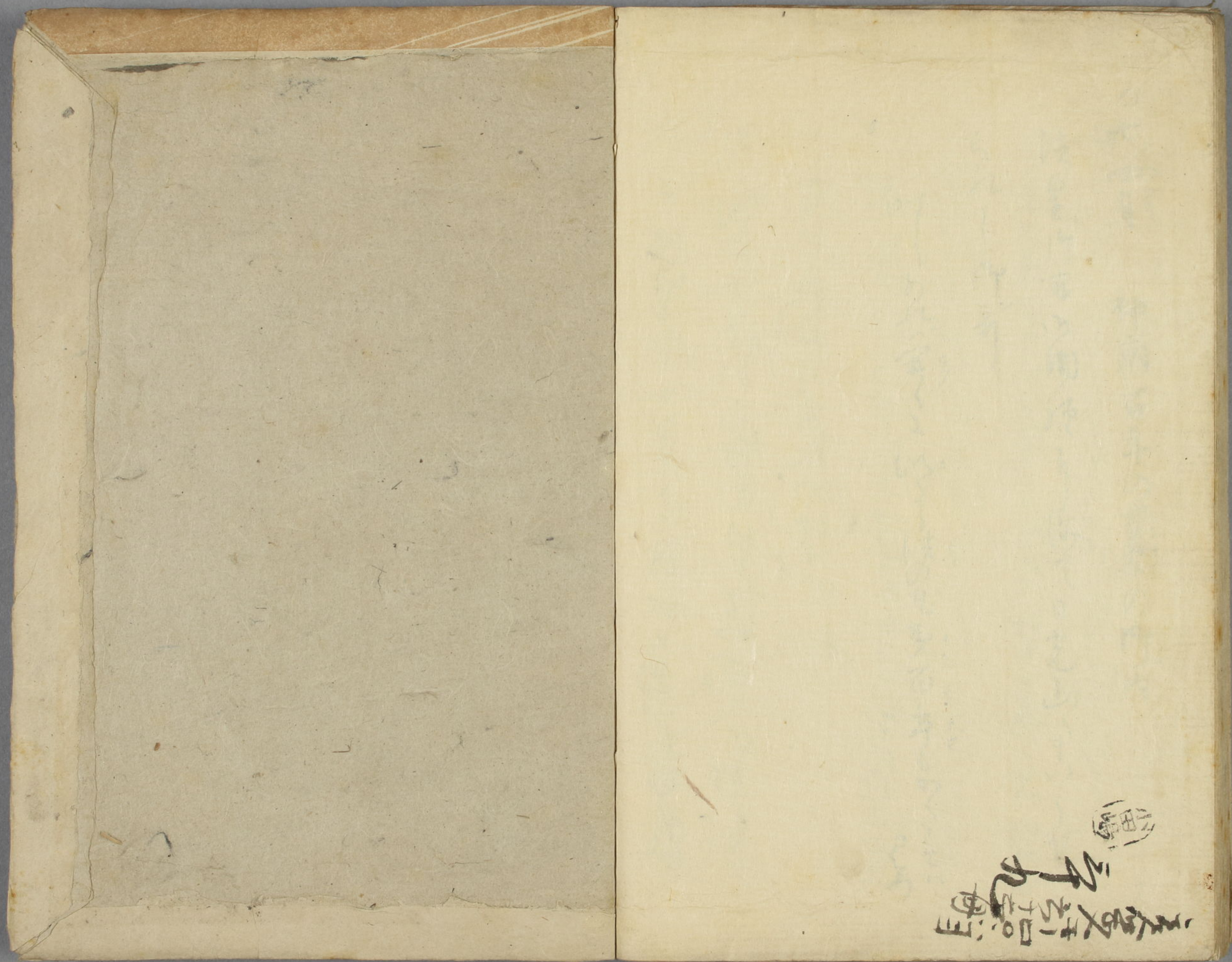
神ミヤ廟ウラ百ヒャク年ネンのノ靈レイ祭サイのノ所トコロ

法ホウ皇ウ所トコロ前マエ山ヤマ細ホソ野ノ行ユキ候コト日ヒ光ミツ山ヤマへマままりりせ

らられれしし所トコロ奇キ

町チヨウ一イツああれれままままししいいつつははののをを夢ユメ百ヒャク年ネンももわわくくままはは

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 山, 野, 行, 候, 日, 光, 山, へ, ま, ま, り, せ, ら, れ, し, 所, 奇.



Handwritten text in the bottom right corner of the right page, possibly a signature or date, written in black ink. The text is cursive and difficult to decipher. There is also a small, circular stamp or mark above the handwriting.

